長山祐司（スクールリーダーシップ開発専攻）

「よりよく生きる」ということ

１．教育を考える一言

「今を生きる」

２．背景

昭和 63 年～平成元年度、私は 2 年間浪人をしました。当時は 18 才人口がピークを迎えようとする時期で、統計[(1)]によると大学・短大の合格率は 64%程度（平成 14 年度で 83%程度）で、統計上、大学入試の競争が最も激しかった時代です。

予備校で私は一人の英語教師に出会いました。先生は 90 分の授業の中で 30 分は雑談をします。その雑談の中で「今を生きる」という言葉を教えられました。激しい競争の中での浪人でしたが、先生の雑談はとても貴重な時間でした。他の予備校生もそのように感じていたと思います。先生の授業は予備校の 200 人教室で立ち見が出るほどの人気でした。

先生は多くの言葉を与えてくれました。「教師の仕事は教壇で生きる姿をみせることだ。生徒に良い影響を与えたいが、どう受け取るかは生徒の側の問題だ。教師ができることは生きる姿を見せることだけだ」、「人の評価や見返りを求めず、ただひたすら、思いを胸に今この瞬間を生きることが大切だ」、「求めることが愛だ。自分の本当の願望に耳を傾け、その*思いを生きること*が愛だ」、「今を生きることが愛だ」、「教育は愛だ」。

「今を生きる」ことを中心に据えた先生の言葉は、私にとって、人として、そして教師としてのスタンスとなりました。私は今でも教壇で、グラウンドで、怪我や病気で悩みを抱える生徒達にも「今を生きる」ことを語り続けています。

３．考察

「～今こそ出発点～　人生とは訓練の場である　わたくし自身の訓練の場である　失敗もできる訓練の場である　生きていることを喜ぶ訓練の場である　今この幸せを喜ぶこともなく　いつどこで幸せになれるか　この喜びをもとに全力で進めよう　わたくし自身の将来は　今この瞬間にある　今ここで頑張らずにいつ頑張る」[(2)]。京都大仙院住職の尾関宗園氏の言葉です。極道の妻から転身して弁護士になり、『だからあなたも生き抜いて』を著した大平光代さんにも大きな影響を与えた言葉です。「今を生きる」という言葉と尾関氏の言葉は同質の視点を持っているように思われますが、この場合、「生きる」というのはただ呼吸をするのではなく、「よりよく生きる」ということが前提になっていると思います。今を生きる私たちが「よりよく生きるため」ために必要なもの、それが教育だと思っています。先生が話されていた「思いを生きる」ことの「思い」の根底にあるものは、「よりよく生きる」ことへの希求であり、普遍的にあるものなのだと私は思っています。

注(1) 文部科学省ウェブサイト、中央教育審議会大学分科会（第 21 回・2003 年 7 月 9 日）議事録、配布資料 3 より、「大学・短期大学の規模等の推移」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/03071001/003.pdf（6 月 8 日アクセス確認）

注(2) 大平光代『だからあなたも生き抜いて』講談社、2000 年

参考文献：　尾関宗園『大丈夫や、きっとうまくいく』KK ロングセラーズ、2000 年